

はじめに

日本列島のおよそ中央に目を向けると、京都と鎌倉という二つの大きな中世都市があり、その狭間にて西から東からさまざまな影響を受けつつ東海道諸国の地域社会は形づくられてきた。

「東海道」というと、一方では古代の五畿七道の一つにあたる地域区分であり、他方では京都と鎌倉を結ぶ街道の名称でもある。前者を取るならば、伊賀国から常陸国までの十五ヶ国に相当するが、本論集で主に扱うのは伊豆国以西の諸地域に相当する。この場合、あるいは「東海地方」と言い換えてもよいだろう。

さて、いうまでもなく、中世という時代は、列島社会のなかの各エリアが多様な個性を帯びた「地域の時代」であった。そして、東海地方の場合、京都と鎌倉という二つの権力の磁場から政治・経済・文化の諸相にて強い影響を受けつつ、さらに小さな地域ごとに独自の特色が形成・獲得されてきた。

今回、刊行にいたった『東海道中世史研究』は、こうした東海地方の諸地域をフィールドに、それらの豊かな個性を描き出そうとする試みである。第一巻『諸国往反の社会史』では交通・流通を介して結ばれる社会の基層のあり方を、第二巻『領主層の共生と競合』では公家・武家・寺社などの諸権力と社会の関わりをそれぞれ共通のテーマとしている。

本書の内容を簡単に紹介しておこう。上記の通り、交通・流通というテーマが本書の諸論文に通底するが、そのなかで政治・経済・文化の諸相にて諸地域の特色を多角的にあぶり出す。また、ネットワークの要点である宿・関・湊の性格と、それらの場に対する領主層の関わりにも注目する。

まず、第一部「行き交う人と物」では、それらの移動、すなわち交通・流通の広がりについて考察する。具体的にいえば、文献史料に見える馬・塩の移送や、考古資料である土器・陶器の流通を取り上げる。また、音楽・造仏の活動を通じた武士たちのネットワークにも注目する。こうした人と物の移動を多角的に検討することで、多層的な交通・流通の広がりが見えられよう。

高橋一樹「牧のネットワークと交通体系―中世前期における南関東とその周辺域を中心に―」は、馬の生産地から京都にいたる貢馬のルートに注目し、人と馬がそれぞれの牧をつなぐ状況を想定する。これを「牧のネットワーク」と概念づけ、とりわけ甲斐国からの南北ルートがちな駿河国について、その交通上の重要性を高く評価する。そして、平泉からの貢馬が相武国府ルートで通過する相模国とともに、諸街道が結節するアクセスポイントの性格を論じる。

鈴木正貴「供膳具が語る西と東―伊勢・尾張・三河―」は、東海地方西半域のこれら三ヶ国を対象に、土師器皿と山茶碗という二つの供膳具について、それらの流通圏を考察する。

池谷初恵「供膳具が語る東と西―伊豆・駿河・遠江―」は、鈴木論文に対して、東海地方東半域の三ヶ国を対象とする。同じくかわらけ(土師器皿)と山茶碗の二つの供膳具に焦点をあてる。

なお、鈴木論文と池谷論文は対となる論稿であり、両論文を通じて東海地方における供膳具の流通の傾向を把握できよう。まず、かわらけ(土師器皿)に関しては、京都の影響を受けた手づくね成形のものがおよそ伊勢国から遠江国

までの西半域の諸国を中心に広く普及した。一方、伊豆国ではロクロ成形のものが主体でありつづけたという。つまり、その成形技法には東海地方のなかで東西差があったと理解される。また、山茶碗に関しては、およそ窯ごとの類型によって流通の広がりや整理され、生産地との関係から地域固有の流通圏の形成が論じられる。

渡邊浩貴「初期鎌倉幕府の文化源流としての伊豆・駿東地域―伊豆狩野氏の拠点とその周辺から―」は、幕府成立以前の武士拠点での文化的状況に注目し、さらに鎌倉への文化流入の歴史的過程を追う。なかでも、京都―鎌倉の関係に収斂しない複雑的な伝播の様相を探るといふ観点から、伊豆半島・富士山麓・駿河湾一帯の地域を取り上げる。特に、武士たちの音楽受容や造像事業に焦点をあて、彼らの人的ネットワークや文化的環境の形成過程を分析する。

貴田潔「駿河湾から広がる塩の流通―地域経済の多層性を捉えるために―」は、地域社会の人々を歴史の主体と位置づけ、彼らを起点とした流通の広がりを捉えようと試みる。具体的には、太平洋側と日本海側の双方で生産された塩を事例として、それが甲斐国・信濃国などの内陸部地域に移送される状況を捉えた。ここに列島社会が南北から交わり合う「塩の道」の祖型を想定し、京都や畿内社会を介さない経済の広がりを認識した。

山本智子「中世後期の東海産陶器生産と流通」は、瀬戸美濃窯と常滑窯の陶器について、その生産と流通の状況を概観する。十五世紀末に瀬戸美濃系大窯と呼ばれる独自性の強い窯炉が完成し、生産力が向上したというが、本論文ではその全国規模の流通の様相が明示される。一方、常滑窯については中世後期になるとその流通規模が縮小し、東海地方から南関東までが主要な流通圏になったとする。そして、その背景に各生産地の全国的な競合関係を見出す。次に、第2部「宿・関・湊」では、交通・流通の要点となるこれらの場について論じるとともに、その支配に深く関わった武士などの領主層の存在に注目する。また、地域社会のネットワークの中核となった寺社の問題も取り上げた。つまり、第1部では多層的な人と物の動きを描いたのに対して、第2部ではそれらが通過・結節する場の性格と

領主層の関与をテーマとした。

高橋慎一郎「東海道の宿と遊女」は、社会集団としての「宿」の内部構造を説明しようとする。そのために、宿への関与が想定される武士などの領主層と、遊女・有徳人などの宿の構成員、さらには寺社との相互関係を注視した。結論として、東海道では宿の長者が遊女の長者と重なる傾向が強いと論じる。また、両者が異なる場合であつても、宿の長者である武士と縁者の女性が一体となつて、いわば「長者の家」を形成していたと評価する。

湯浅治久「都鄙間における陸関の展開と在地領主支配―国家的システムと在地慣習の関連から―」では、「国家的支配」と「在地慣習」の関係を前提に、在地領主の交通への関与を捉えようとする。特に、室町幕府・鎌倉府のもとで設置された公用関の多くにて、在地領主の掌握・請負が見られるという。さらに、十五世紀中葉になると、彼らの実力支配が進展し、新関の設置や路次物騒という形で交通障碍が頻発したと論じる。

伊藤裕偉「道・宿・関・港の実像をどう探るのか」は、道と、道を介して成立する宿・関・港について、それらの実像を検討する上で必要な視角と課題を提示する。考古資料と文献史料の情報はそれぞれ断片的であり、こうした場の性格を論じる際の限界を意識すべきだと警告する。中世の交通史に関わり、研究者はいわゆる都市的な場に過大な評価を与えがちだが、今後その本質に向き合う上で必読の論稿となろう。

服部光真「中世寺院の展開と東海道周辺の交通―三遠国境南端地域を中心として―」は、交通との関わりとともに、地域社会における中世寺院の存立を論じる。まず、国境を越えた僧侶たちの日常的なネットワークが当該地域に広がっていたという。さらに、法華宗陣門流の本興寺の事例から、在地領主や村落に支えられた中世寺院の姿を描き、その存立が交通を介した地域社会全体の結合に規定されていたと評価する。

以上のように、本書『諸国往反の社会史』では社会の基層における交通・流通の実態を主たるテーマに据えた。つ

まり、人と物の移動を多角的・多層的に描くとともに、その通過点・結節点となる宿・関・湊などの場の性格と領主層の関与を論じている。

なお、続く第二巻『領主層の共生と競合』との関わりにも触れておこう。本書では交通・流通の実態に焦点をあてたが、これが各時代の国家的支配体制とどのように関わっていたかは残された課題である。いうなれば、京都と鎌倉という二つの権力的な中核都市に挟まれた東海地方の諸地域は、公家・武家・寺社という諸権力の均衡のもとに編成されつづけた。

そうした意味で、本書で明らかにされる地域社会のネットワークや、それを統御しようとした領主層の動向は、各時代の国家的支配体制のもとでどのように絡め取られたのだろうか。具体的には、院政・鎌倉期であれば莊園制や鎌倉幕府による武士たちの統制が、室町期であれば室町幕府・鎌倉府の緊張のもとで進む地域社会の編成が大きな論点となろう。さらには、戦国期に入り、これらが弛緩すると、戦国大名権力の展開とともに諸地域の社会構造はどのように組み替えられたのだろうか。これらの課題には、次巻『領主層の共生と競合』で正面から向き合う。

最後に、この二冊の論集が編まれた経緯に触れておきたい。

二〇一九年に静岡県で開催された第五七回中世史サマーセミナー「富士山南麓から広がる中世社会―境界としての駿河―」がその発端となっている。シンポジウムでは池谷初恵・近藤祐介・木下聡・鈴木将典の諸氏に報告いただき、西国と東国の境界帯に位置する駿河国の特質を明らかにしようとした。そして、その後のビール講にて論集化の話題が上がったことが大きなきっかけとなった。

ところが、後日、実行委員会に関わっていた大石泰史氏が高志書院の濱久年氏に論集化の企画を持ちかけたところ、「視野が狭い」という批判を受けた。そのため、度重なる練り直しの結果、西は伊勢国から東は伊豆国にいたる東海

地方のほぼ全域にフィールドは広がった。また、濱氏の助言と手腕のもと、文献史学だけでなく、考古学の研究者にも参画いただき、まさに高志書院らしい、極めて学際的な企画へと変貌することとなった。

一方、中世史サマーセミナーからの問題意識を継承し、その後も数度の打ち合わせと研究会を重ねてきたことで、二冊の論集の執筆の間では主たる論点・視角とともに多くの情報が共有されている。コロナ禍の困難も挟み、およそ五年間もの歳月を要したが、その分、重厚な共同研究の成果となつたといえよう。

東海地方は列島社会のなかで重要な位置を占め、そこに生きた人々は政治・経済・文化の諸相で特色ある地域性を育んできた。こうした豊かな地域の性格を総合的に捉えることは、必ずしも容易でなく、一筋縄でいかない。しかしそれでも、専門を異にする研究者が集まり、共同的な成果を出したことの意義は、小さくなからう。地域に根ざした歴史学を志す者として、今回、二冊の論集が形になったことには、その社会の新しい知の共有をなしたという意味で大きな喜びを感じている。

二〇二四年九月吉日

貴田 潔